

月刊

2012

11
月号

みんぱく

特集

どこへ行く日本学？



アジア学のみかた リーッカ・ランシサルミ / 人類学における日本研究の50年 中牧 弘允
日本の政治力と文化力 バルト・ガーンズ / 日本学の行方 フロリアン・クルマス
中国の日本文化を見るまなざし 曹 建南

西洋からの刺激を受け発達した日本の「洋学」は、江戸時代初期から後期まで医学と兵学に重点を置いていた。一六五〇年以降、熟練した出島商館医と彼らの患者だった身分の高い日本人たちのおかげで、新しい治療法や軟薬、膏薬が日本に普及した。大砲と臼砲及びそれに必要な測量術の受容はそれより早く始まっていたが、徳川体制の安定化にともない、兵学に対する幕府の関心は一世紀余にわたり後退してしまう。それに対して医学は洋学の中核であり続け、医師たちの関心が衰えることはなかった。その背景にあったのは医療の有用性だけではない。社会的拘束の少ない日本人医師たちは、比較的自由に新知識を学べるという極めて恵まれた境遇にいたのである。

資源が乏しく、輸出力も限られていた日本では、経済が常に政策に決定的影響を及ぼしていた。金銀の流出を抑えるため、幕府は日蘭貿易の形態を数回にわたり再編し、一六六〇年代から不要とされる品々の輸入を禁止したり、国内資源の開発に取り組んだりしていた。紅毛(こうま)医療もその影響を受け、財政的負担の大きい高価な舶来薬に代わるものとして、本草研究や菓草

プロフィール
Wolfgang MICHEL, 1946年生まれ。ドイツ・フランクフルト大学卒。1974年来日。九州大学助教授、教授、研究院長、副学長など歴任。2010年、定年退職。九州大学名誉教授。日欧文化交流史、医史学及び洋学の研究。1995年、日本医史学会学術奨励賞受賞、2004年、ドイツ連邦共和国功労十字勲章。M.A.(東洋言語文化科学)、博士(文化科学)。http://wolfgangmichel.web.fc2.com/



江戸期の医師の「越境」と好奇心

ヴォルフガング・ミヒエル

植物の国産化が大いに促進された。適塾や芝蘭堂のような大規模な蘭学塾が現れる前に、知の伝播において中心的役割を果たしたのは長崎の阿蘭陀通詞だった。彼らの語学力は、杉田玄白が『蘭学事始』で示唆しているよりも遙かに優れていた。また、医学を志す通詞家は代々、書籍、写本、医薬品、医療器械などを大量に収集していた。国外への道は閉ざされていたが、彼らの私塾で学ぶ門下生にとって、外の世界はより身近に感じられたことだろう。さらに、この「長崎遊学」により次第に全国各地に広がる交流網が形成され、一八世紀中頃から繰り返し開催された薬品会(やくひんかい)は一種の臨時博物館として、ものと情報の流布をさらに拡充した。そして、西洋を凌ぐほどの出版業の隆盛にもかかわらず、写本の伝統は幕末まで健在だったので、奥地の医師にも最新の情報が伝わり、いわゆる在村蘭学を支えていた。

日蘭交流の成果は西洋医学の理論的背景の理解や、ヨーロッパにおける近代医学のダイナミズムの認識にはいたらなかった。とはいえ、約二世紀にわたり日本の医師は数々の治療法や医薬品を導入し、人体の構造にも眼を向けるようになり、言葉の壁を自力で乗り越え、新しい概念的基盤を固めていったのである。

月刊
みんぱく

11月号日次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
江戸期の医師の「越境」と好奇心
ヴォルフガング・ミヒエル</p> <p>2 特集
どこへ行く日本学?</p> <p>3 アジア学のみかた
——ヨーロッパの日本語学習者からみた日本
リーッカ・ランシサルミ</p> <p>4 人類学における日本研究の50年 中牧 弘允</p> <p>6 日本の政治力と文化力 ハルト・ガーンズ</p> <p>7 日本学の行方 フロリアン・クルマス</p> <p>8 中国の日本文化を見るまなざし——茶道をめぐって
曹 建南</p> <p>10 研究フォーラム
こども、いのち、医療
道信 良子</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
森の中の日本資料——フィンランド・国立語文化博物館
小島 摩文</p> <p>16 連載リレー 知の収蔵庫
面白いモノ その3
つくりものは現場で作られる
笹原 亮二</p> <p>18 多文化をあきなう
鳥の笛からはじまった
下川 祐真</p> <p>20 異聞逸聞
マンガ文化は永遠か
庄司 博史</p> <p>21 みんぱく私の逸品
蓋付菱形香炉の置物
ヨーゼフ・クライナー</p> <p>22 フィールドで考える
鹿の涙、人の涙——笹崎鹿踊りの復活
林 勲男</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|



東日本大震災復興支援のためのチャリティイベント「ヤパンマルクト」(ライデン、2012)にて(撮影・山本絵美)

アジア学のみかた ——ヨーロッパの 日本語学習者からみた日本

リーツカ・ランシナルミ
ライデン大学准教授

日本語を学ぶ理由

世界の日本語学習者は今日三〇〇万人におよぶ。多くは近隣諸国だがヨーロッパでも日本語への興味は増し続けている。日本語や中国語など主要な非ヨーロッパ言語を重視し始めた背景には、よりグローバル化しつつある市場経済があるのは疑いない。事実、中国語学習者の動機は経済力への関心が主流となっている。しかし、興味深いことに日本語では、ことばそのものへの関心や交流など単純で個人的なものが半数以上をしめる。二〇〇九年の国際交流基金による調査では、マンガやアニメを知りたいというのも回答者の五〇パーセントがあげている。「将来の就職」という理由はヨーロッパでも増加はしているものの、より日本に近い東アジアや太平洋地域におよぶとはわたしには思えない。

ヨーロッパの学生にとって日本語に市場価値があるとはいえないが、そのかわり、たとえば日本のマンガやアニメにみられる若者ことばに興味をもち、ファンサプサイト (fan-subtitled site) に自分の訳を投稿したり、コスプレに魅了されたりすることもある。日本のオンラインのオタクと意気投合してゲームにふけったり、J-POPやロリータファッションのファンとなって、関連グッズをネットで注文するものさえみられる。フィランドではいまや日本の文化への興味から日本語をまなぶというのは珍しくない。

どこへ行く日本学？



麦わら細工で作られた入れ子箱の装飾 (エストニア歴史博物館所蔵)



A.D.クルーゼンシュテルンの航海記 (Reise um die Welt 1803-06, Petersburg 1810-1812)より (タリン市博物館所蔵)

海外の日本学は、古くはヨーロッパに影響をあたえた浮世絵にはじまり、近年まで日本の経済発展に支えられる形で、武士道や茶道、生け花、わびさびなどに象徴される「日本的」精神性や美意識を中心に、日本人や日本文化特殊論を展開してきた。しかし今日、韓国、中国などアジア諸国が台頭するなか、日本特殊論もその勢いをうしなひ、漫画やJ-POPなど大衆文化にその存在感をかりうじて維持するにいたっている感がある。その一方でヨーロッパなどでは、従来の日本特殊論にこだわる日本学からはなれ、一般の社会学、政治学の視点から日本を分析しようとする傾向が強まりつつある。本号では海外から日本を観察してきた日本研究者にその動向をかたつてもらう。



イベントに参加した日本語学習者などからなるチーム「若武者」(撮影・山本絵美)

日本語学習者の好むトピック

わたしが指導でかかわってきたオランダとフィンランドの学生の卒業論文で、日本語に関連するテーマをみるといくつかの傾向が識別できる。ひとつのグループは日本語の専門家をめざす学生のもので、多くは日本語の作品を自分の母語や英語に翻訳する際のプラクティカルな問題を扱おうとする。好まれるトピックは、マンガや小説の翻訳にみられる擬音語・擬態語の扱いに関するものだが、村上春樹は特に人気がある。

また第二言語として日本語を学ぶ立場から、日本語教科書の社会的・語用論的な情



Japan: föremål och bilder berättar = Japan: artifacts and images tell the story (P.Holmberg, E.Myrdal-Runebjer, M.Braw Stockholm: Östasiatiska museet, 2011) の表紙より



フィンランドで開催された印籠展 (タンペレ、2010)



『文明の形成と発展』は、現在から過去にさかのぼる手法をとった、当時の記念碑的な知的生産物である。
その梅棹が実質的に主宰し、「館長直営」といわれた一連のシンポジウムが「近代世界における日本文明」（通称「文明学シンポ」）であった。谷口財団の支援を受け、ペフ・ハルミ（スタンフォード大学）とヨーゼフ・クライナー（ボン大学）の両氏をコーディネーターとして毎年一週間にわたり開催された。それは一九八三年から一九九九年まで一七年間続き、海外からも日

報分析や日本語の男女差などに関心を向ける学生もいる。後者とのかわりでは、マンガや映画の特定のキャラクターと結びついた「役割語」や同性愛者のことは、またサブカルチャーに属するロリータやギャル語などの観点からも研究されている。後者のグループは特殊なギャル文字にもみられるが、ネット上で流通する言語とかわりが深く、近年言語研究において盛んな情報源の活用として象徴的である。
一方、日本語の表記体系は強い視覚性と長い伝統をもつが、特に漢字に引きつけられるものも多く、なかにはネット上で笑ったことをあらわす「笑い」表記の分析を卒業論文の課題に選択する学生までみられる。また社会言語学の観点から日本語方言や日本とオランダの少数言語の比較、オランダ語と日本語のバイリンガル話者の言語意識などにおいて研究が展開されている。
現在、日本語学生の関心はかつての古文の文学的解釈から、非西欧学以外の諸領域においても今日研究されている、社会的で現代的テーマに移りつつある。

学生の学習意欲を保ちつつ、言語を含めたアカデミックな道具箱をバランスよく維持していくのは、現在と未来をみすえた政策決定者の手にある。ヨーロッパのアジアリテラシーへの多様な関心を背景に、日本の地位をいかに確保するかはヨーロッパの研究者や学習者にとって共通の課題となっている。

本研究の学者をたくさん招いた。すべて日本語でなされ、日本というカードを入れて近代世界を理解しようとする壮大なこころみであった。そこでは「生態系から文明系へ」という梅棹のテーマがさまざまなテーマに即して具体的に論じられた。
文明学シンポが終了した後、ペフ・ハルミ氏が日本に滞在する外国人の文化人類学者によびかけ、日本研究の集會をはじめた。これを核に日本人も加わって Anthropology of Japan in Japan (AJJ) が二〇〇一年に設立された。それは第一回の民博大会以降、春のワークショップと秋の年次大会を国内で継続的に開催してきている。
AJJはおもに英語で報告がなされるためか、外国人の参加者が日本人のそれを上回っている。日本人の場合は外国で日本を研究テーマに学位を取得した人が多い。農村研究は影を潜め、国民文化論や日本人論は姿



チャリティで「若武者」が販売したカレーの売り上げは、震災復興支援団体に贈られた (撮影・山本絵美)



JAWS第12回大会 於民博 1999 セッション風景

を消した。かわりに大衆文化論が主流となり、都市研究や企業研究も幅をきかせている。文化遺産や教育問題、ジェンダー論、多文化論なども人気のテーマである。
また、JAWS (Japan Anthropology Workshop、通称ジョーズ) が一九八四年にオックスフォードで立ち上がり、EASJ (European Association for Japanese Studies) の合間を縫って開催されている。これはJAWSシリーズとよばれる単行本を刊行しつ

づけ、グローバル化の影響か、アメリカ、カナダにもウイングをひろげている。民博では一九九九年に大会を開催した。いささか民博を中心に回顧した概説となったが、日本を対象とする人類学的研究は完全に日本人の手を離れ、グローバルな連携を深めている。今夏、EAAA (East Asian Anthropological Association) が正式に発足し、東アジアをフィールドとする人類学者たちの東アジア的ネットワークが構築の途上にある。



メイドカフェについての日伊共同報告 'Amusement Café Made in Japan' JAWS第18回大会 於オースロ大学 2007

人類学における 日本研究の五〇年

なかまき ひろちか
中牧 弘充
吹田市立博物館長



JAWS第12回大会 於民博 1999 参加者の記念撮影

日本を対象とする人類学的研究はますます多様化している。半世紀前は農村研究が主流であり、中根千枝の『タテ社会の人間関係』や米山俊直の「社縁論」が会社組織に目を向けはじめたところだった。同時期、日本人の人類学者はようやく自由に海外のフィールドワークに出かけられるようになり、日本は置き去りにされがちとなった。その一方、海外の日本研究者は高度成長めざましい日本に注目し、その文化的要因をさぐりはじめた。エズラ・ヴォーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』はその時代の代表的著作である。民博は開館まもなく特別研究「現代日本文化における伝統と変容」を組織し、国民文化から大衆文化への流れを把握しようとした。九冊のシンポジウムの記録は柳田國男の『明治大正史世相篇』を引き継ぐ集団的営為であった。梅棹忠夫の『日本とは何か―近代日本

日本の政治力と文化力

バルト・ガインズ

ヘルシンキ大学特任教授・

フィンランド国際関係研究所研究員



エスラ・ヴォーゲル著『ジャパ・アズ・ナンバーワン』
(TBS アリタニカ 1979年)

東アジアへの注目

昨今のグローバル・レベルにおけるアジアの台頭は現在ヨーロッパ人の注目を集めている。経済面ではアジア内貿易は活性化し、一〇年前に実現した自由貿易協定の半分以上はアジア地域内のみで完結しているのがその特徴のひとつである。さらに政治・外交の面ではいわゆる地域主義が進み、一五年前からASEAN+3、東アジアサミットなどのような地域機構が設立されている。しかし、アジアの台頭は何よりも中国の著しい進出に特徴づけられている。中国は世界第二の経済勢力になったのみではなく、軍事力増強により南シナ海などでますます活発な態度をみせているのである。

このような展開のなかで、西欧の政治界、企業、学術界が東アジア地域、特に中国を注視していることは、別段驚きに値しないだろう。八〇年代に流行った「ジャパン・アズ・ナンバーワン」および日本特殊論の論争ははるかむかしのことのようにみえる。とはいえ、現在特に東アジアにおける日本の地位および役割について政治学・国際関

係論の観点から研究する必要性が強く感じられるのである。その理由として三つの点が挙げられる。これらは今後の日本学の動向を考えるうえで示唆的であろう。

日本研究の三つの必要性

まず第一に、「経済発展第一主義」および「外交における低姿勢」という吉田ドクトリンの時代が終わりを迎え、日本は中国のグローバルな台頭に併せて、外交の面でも活発的になってきたことである。例えば、日本は、九〇年代初頭は地域主義に対して曖昧な態度をとっていた。しかし最近アジア共同体を作ることと最終目的とする地域主義に積極的な役割を果たそうとしている。つまり日本の政府は一〇年前からアジアの地域機構の形式、メンバーシップ、対策項目などを積極的に進めようとしている。中国をいわゆるマルチテララな環境に入れ、中国の増えつつある影響力を抑制することがそのおもな目的であると考えられる。アジアにおける地域制度の進行は自らを地域統合のモデルとみているEU（欧州連合）にとって関心深いのはいうまでもない。

第二の理由は、東アジア地域の安全保障の面からみても日本は重要な役割を担っている。ロシアとの北方領土問題、中国との尖閣問題、韓国との竹島問題がまだ解決されていない。このような地域的な問題は

大きくヨーロッパとアジアの経済・貿易関係に影響をおよぼすのは確かである。アジアにおける国際情勢は西欧の一〇〇年前のそれに似ているという人もいる。日本は、安全保障条約を結んでいるアメリカと大國の中国の狭間（はざま）にあり、同じくソフト・パワーになるうとしていくヨーロッパは日本の大切なパートナーになれるだろう。

そして最後に、日本の大衆文化のグローバルな流通と政治力、いわゆるソフト・パワーの関係にもっと注目する必要があるだろう。日本政府は数年前からポピュラー・カルチャーを通じて「クール・ジャパン」あるいは日本の「国民総クール」を養い、世界にアピールしようとしている。大衆文化は日本の外交に影響を与え、同時に日本人がもつ独自の「世界像」がアジアやヨーロッパの若者たちに浸透しつつある。尖閣問題をめぐって反日デモをおこなっている中国の若者でさえ、家では日本のアニメ、漫画やビデオゲームを楽しんでいるのではないだろうか。このような日本の「コンテンツ」が特にアジア地域に、日本のどのようなイメージを広げようとし、そして当地の人びとにどのように受け止められているか。日本の文化力ともいえるように、経済力、政治力に比べ、どこまで影響力をもちうるのだろうか。政治、経済に力点をおいてきたわたしにとって、注目したい観点である。

日本学の行方

フロリアン・クルマス

ドイツ日本研究所所長

かつて西欧からのアジアをみる視点が一方的で偏向していることが指摘されてきた。特に日本に対しては早くから独特のイメージが形成されその呪縛はいまだ払拭（はら）されたとはいえない。しかし日本を特殊視してきたのは外国人ばかりではない。日本人の日本研究においてもその傾向はみられ、比較的あたらしい学問領域である社会学においてさえその枠から自由であったとはいえない。

西洋と非西洋の社会学

社会学は西洋人が自らの社会を研究することにより誕生した学問である。多くの日本の学者は西洋で発展したカテゴリーや理論をイデオロギーや偏見に基づかないものとして受け入れた。しかし、いわゆる普遍のカテゴリーは日本に適さないということも思っている学者もいる。例えば、佐藤嘉倫（さとう かつら）は日本社会に関する研究が「家」ではなく、「ファミリー」という用語を用いることで、「多くの重要な側面が失われる」と危惧している。しかし、この懸念は「ファミリー」の概念は西洋社会のどこでも等しく

あてはまるという誤った前提に基づいている。オランダの家族とギリシヤの家族は異なっている。その違いを描き出すことは、日本の家族との違いを描き出すことと同様に可能なことである。

「家族社会学」に対し、「家の社会学」は確立された用語であるとはいえないであろう。浜口恵俊（はまぐち けいすけ）は「西ヨーロッパに起源をもつ社会学の方法は、日本を研究するには限定的な適用性しかもたない」と論じ、社会における主体を「個人」と「間人」に概念化し、日本独自の社会モデルを提唱してい

る。確かにこの方法をとることで、人間性の集合的な側面はより重要性を帯びるであろう。しかし、浜口の主張は強い西洋志向を保持し続けた社会学の本流においてインパクトをもつことはなかった。つまり、方法論において視点を狭くすることは日本についての知識を国際的に広めるうえで有望な手段ではないのである。むしろ既存のパラダイムに則（したが）って研究をおこなない、内側から変えていくことの方がより適切なのである。

多元化する学問体系

このことはふたつの要因と相まって、一世代前よりも可能になっている。そのひとつは過去一世紀半のあいだ、日本が西洋の生活・労働・思考形態を蓄積、吸収し、そして適応してきたこと、もうひとつは西洋の学会が非西洋地域の出身で非西洋的視点をもつ人々の流入により、学問体系を多元化させ多少なりとも西洋中心主義的ではなくなってきたことである。もちろん、このことが「社会学が自然科学になる」ということを意味しているわけではない。しかし、西洋で形成された分析手法をもって日本社会の現実を考察し、それらが不十分であると判明した場合、改善していくことは可能なのである。

このようなアプローチの例は内田由紀子（うちだ ゆきこ）、北山忍（きたやま しのぶ）の幸福に関する研究である。近年、主観的幸福感と生活の満足度に関する多く



現代日本の結婚式



周作人の写真

改革開放期の訪日派

改革開放初期に訪日した中国の文化人は、一九三〇から四〇年代生まれの人が多い。中国の物資乏乏時代を経験したせい、高度成長を遂げた日本の物質的豊かさにショックを受ける。茶席に招かれても初めて見た部屋のクーラーに驚き、茶碗ひとつが七〇万円もすると聞くと、「テレビ一五分だ」と二度びっくり。

裏千家に招かれたある作家は、今日庵の国際局長から名刺を渡されて「天道様よ！国際局まで」と心のなかで叫んだり、たかが一口の茶を飲むのに何時間も費やされた、と嘆いたりする。そして、抹茶の味について、「インスタントラーメンの調味料のようだった」と奇怪な感想を漏らした人もいる。前述の今日庵に招かれた作家も、亭主の茶を点てる所作を見た感想を、「お」そかで、



現代日本の家族

の国際比較調査がおこなわれており、そのほとんどがアリストテレス以来、ヨーロッパで形成されてきた「良い生活」の概念は普遍的なもので、定量的手法を用いて客観的に考察できることを前提としている。内田、北山という日本とアメリカを拠点にする文化心理学者の研究はこの前提に立つたうえで、アメリカと日本のあいだには幸福の概念に関する相違があることを明らかにしている。それはアメリカ人が幸福の概念を個人の業績に関連づけてとらえるのに対し、日本人は社会の調和をより重視して考えるというものである。この種の研究は極めて適切な例であろう。つまり、それぞれの国に特有な研究パラダイムを構築しようとするのではなく、既存の分析枠組みを用いて調査をおこない、その前提の調整を促す、または補強する啓発的な結果を提示しているのである。

煩瑣で、わざと神秘的らしくしている」と書いている。また、「いささか変態的でつまらない」と酷評する人もいる。日本の茶道文化をちゃんと理解しようという姿勢はあまり見られなかったのである。

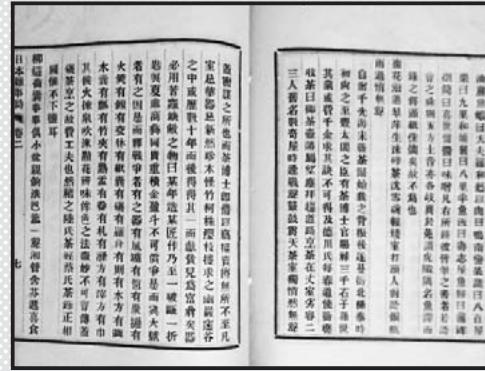
社会転換期の留日派

改革開放後の中国は、社会構造や経済体制、イデオロギーのモデル・チェンジをはかる「社会転換期」に突入するが、この時期に、日本で留学していた留学生が中国に帰って活躍し始める。なかでは中国で日本茶道の紹介と研究に努める人も多い。

一九九〇年代の初期から、帰国留日生によつて書かれた日本茶道の本がいくつかが刊行され、日本茶道を本格的に中国に紹介する時代の幕を開いた。中国で茶文化ブームを巻き起こしつつあり、日本の茶道文化に興味を示す中国人が増えはじめた時期でもあったので、留日派による茶道の本はそのニーズにこたえ、中国人の日本文化への理解に貢献したといえよう。

それと同時に、留日派たちの中日茶文化の比較研究も活発になってくる。比較は、両国の歴史や自然環境、民族性、美意識などに着目しておこなわれるが、茶道の特質、中日茶文化の相違を究明しようとする留日派の努力がうかがえる。

黄遵憲の詩集「日本雜事詩(にほんざつじし)」(1880年刊本)に載っている「茶道」詩



清末の詩人、外交家黄遵憲



曹建南 民博 外国人研究員・上海師範大学副教授

中国の日本文化を見るまなざし
— 茶道をめぐる —

清末民国期の知日派

一八七七年に清国の駐日公使館の参贊官(書記官)として来日した黄遵憲と、日中戦争の時日本に協力したことで「漢奸」として終戦後投獄されたこともある周作人は、清末民国期の知日派として知られるが、それぞれ知日派としてのまなざしで日本茶道を見る。黄遵憲は七言四句の詩で茶道の情景を歌い、詩の自注のなかで侘び、寂びの美意識を強調したうえで、茶道の奥義を言葉で言い伝えられないものがあるとした。

魯迅の弟でもある周作人も、中国に茶道が生まれなかった原因は中国人の「宗教的情緒に乏しい」ことにあるという。彼によれば、「茶道には宗教的な匂いがあり、超越的である」のに対して、「中国人の喫茶は凡人法で儒家的ともいふべき」であり、日本の僧侶や武士は風雅に通ずるものが多いが、中国の指紳は「俗物」が多いため、茶道は日本にだけ生まれたという。周は茶道から中日国民性の相違を追究しようとする姿勢を見せている。

小谷城郷土館で茶道を体験する上海師範大学の学生



小谷城郷土館で巨大な茶碗を鑑賞する上海師範大学の学生たち

経済成長期の哈日派

社会転換を推進しながら経済成長を続ける一九九〇年代末の中国には、「哈日族」とよばれる日本かぶれの若者があらわれる。そういう哈日派の若者は、茶道などの伝統文化にもよく「哈」する。別にこれといった理由がなくても、茶会に行く。抹茶の味とか、形式ばりの作法とかは、一切関係なし、楽しければいいと、「哈日派」の茶道観は単純である。

八月初旬に、上海師範大学の学生五名が関西の福祉施設の見学に来たついでに、堺市の小谷城郷土館で茶道の体験をしていたが、日本滞在の一週間のうち、いちばん楽しかったという。やっぱり「哈日派」なのだ。中国人の茶道を見るまなざしは時代とともに変わってきたのだが、今日の「哈日派」から優れた茶道研究家が生まれ、茶道への理解を通じて日本文化、さらには国民感情への真の理解につながれば、と願うものである。



こども、いのち、医療

みちのぶ りょうこ
道信 良子

札幌医科大学医療人育成センター准教授

「こども」は、「おとな」への成長過程の状態として考えられがちである。しかし、こどもはこどもとして現在を生きる。そのような視点でこどもをみて、理解していけば、おとなには気づくことのできないことが見えてくるかもしれない。



こどもの創作あそび。おばあちゃん、おじいちゃんを描く。宮城県気仙沼市(2011年5月、岩本重久子撮影)

こどもとは何か
「こどものいのち」について考える研究会を始めた。研究会のメンバーは、医学・医療の専門家(医学、看護学、理学療法、保健学、ソーシャルワーク)と、人間の文化や医療とのかかわりを研究する文化人類学・医療人類学、人間の社会と医療のかかわりを研究する医療社会学の研究者などからなる一〇人である。わたしたちは、私たちの臨床経験や研究成果をもとに、こどもとは何か、いのちとは何か、こどもがよりよく生きるというのとはどういうことか、そのためにおとなはどのような社会をつくらなければならないかについて考えている。
また、異なる専門分野の人たちが集まり、こどものいのちについてさまざまな立場や見方から議論することで、こどもと社会、こどもと文化、こどもと医療との関係につ



小学校2年生男子。「わかめスープ」。鳥の特産であるわかめのスープ。北海道利尻富士町(2010年2月、小学生児童の作品。道信良子撮影)

いてのあらたな視点が生まれるとと考えている。研究会で取りあげるテーマは、こどものグリーフ(喪失によって引き起こされる心身の反応)、こどもの予防接種、狩猟採集民のこども、新生児治療、日本のこども観、こどもの身体観、こどものリハビリテーション、こどもの国際保健、こどもとマス・メディアなどである。以下に、これらのテーマにとりくむうえでこの研究会の視点を簡単に示す。

こどもの成長

おとなはいつも自分の時間を基準に、ちよど自分のこども時代のことを「ふり返る」ようにこどもを見ていると思う。こどもを何十年も先にいる人(おとな)から見られているような気分させることだろう。文化人類学や医療人類学はその人の立場にたって考えるという方法を使うが、そのような学問でもこどもに関しては、多くの場合、おとなの視点からこどもが成長す

る過程を研究してきた。たとえば、こどもはその社会の文化を身につけて成長するため、文化人類学ではこどもが誕生してから成人するまでに経験するさまざまな「通過儀礼」の内容や、通過儀礼のたびに組みなおされるこどもと社会とのかわり方について探究してきた。

こどもが先生

こうした見方もこどもの理解には大切だが、こどもの生きている時間のなかでこどもを理解するものではない。そこでわたしたちは、今までとは少し違うふたつの視点

からこどもについて考えた。ひとつ目は、「こどもが先生」という立場で、こどもを理解する方法を考えることである。そのため、こどもとのコミュニケーションにおいて、こどもが好きな音楽や遊び、運動など、さまざまな表現を使う。研究メンバーの何人かは東日本大震災の被災地でこどもたちを支援する活動に参加した。そのうちの一人は、避難所でおこなわれた遊びや創作活動をおして、こどもたちの不安を和らげることや、こどもたちの話を聞くことをした。

研究メンバーには北海道の利尻島で小学生のこどもの食と健康について調査した人もいる。調査には「フォトボイス」という手法を使い、こどもたちに体育館で遊ぶ様子を写真に撮ってもらい、朝食の絵も描いてもらった。その後、こどもたちも交えて、食や健康に関するこどもの考え方や、こどもの視線からの食と健康の課題について議論した。

いのちとは何か

ふたつ目は、こどもを「いのち」とのかかわりで考えるという視点である。こどもはこどもの時間を自分なりに生きている。そして、自分のいのちについての情報をさまざまな発信している。そのような「いのちの情報」の内容と、おとな側の受けとめ方について考えている。

たとえば、何らかの病気をもつて生まれてきた赤ちゃんを集中的に治療する新生児集中治療室では、致命的な赤ちゃんのいのちが救われることもあれば、さまざまな理由から、治療が中止される場合もある。そのような赤ちゃんは、そのいのちの時間が数時間や数日であっても、体温、表情、わずかな身体の動きなどで自分のいのちの情報を周りに伝えている。

他方で、医療の恩恵を受けて一命をとりとめても重い後遺症が残り、障害をもちながら生きていくこどももいる。また、家や学校、遊び場など、毎日の生活の場を一瞬間のうちに津波で流されたこどもも大勢いる。被災地での創作あそびにはそのようなこどものこころの情報がこめられている。

このようなこどもたちをこどもの生きている時間からとらえ、そのいのちの情報を正しく受けとめ、こどもがどのようないのちの時間を生きているか、その身体的、社会的状況にかかわらず、よりよく生きられる社会とは何かを考え、こどもの視点から知見を発信することをこの研究会は目指している。

共同研究

「現代の保健・医療福祉の現場における

「子どものいのち」

代表：道信良子

2011年10月〜2015年3月



こどものフォトボイス。カメラの使い方を確認している。北海道利尻富士町(2010年2月、道信良子撮影)

特別展

「世界の織機と織物」

織って！みて！織りのカラクリ大発見！
ヨーロッパで紀元前から使われてきた、錘を使った織機。カナタの少数民族「ネネのヤマアラシ」のトゲを織り込んだ織物をはじめとして、世界各地の多種多様な織機と織物を紹介します。会場の2カ所では、さまざまな織りのカラクリも体験できます。

会期 11月27日（火）まで
会場 特別展示館および
本館1階エントランスホール

関連イベント

◆ワークショップ
▼11月11日（日）
「ふたりで織りましょう！指をつかった織り」
▼11月25日（日）
「カード織りの世界」もじれ、から生まれる
文様とテクニチャー」
※参加無料、要申込
※ワークショップの申し込みは締め切りました。

◆ミニレクチャー
11月4日（日）・10日（土）・15日（木）
23日（金）・祝・24日（土）・27日（火）
時間 13時～14時
会場 特別展示館
※参加無料（要観覧料）、申込不要

機織りの実演

▼11月24日（土）
「ジャカード織機の実演」

▼11月27日（火）
「ドビー織機・足踏み織機の実演」

◆みんなくワークショップ・サロン
詳細は本誌24ページをご覧ください。

企画展

人間文化研究機構連携展示

「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」
会期 11月27日（火）まで
会場 本館企画展示場A

関連イベント

◆みんなく公演
「南部藩壽松院年行司支配太神楽」
日時 11月18日（日） 14時30分～15時30分
場所 本館1階エントランスホール
※参加無料、申込不要

みんなく映画会／みんなくワールドシネマ
「未来を生きたる君たちへ」
今回は、「デンマーク・スウェーデン合作の『未来を生きたる君たちへ』」を上映します。アフリカの難民キャンプで支援活動を行っている医師が直面する、故郷の家族の問題や自身の心の葛藤を描いた映画です。この作品を通して支援することの意味を、参加者の皆さんと共に考えていきたいと思います。

日時 11月10日（土） 13時30分～16時30分
（開場13時）
会場 講堂（先着450名）
※参加無料、申込不要
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

国際シンポジウム
「ヒーリング・オルタナティブス——ケアと養生の文化」
このシンポジウムでは、人びとの生活におけるヒーリング・オルタナティブスの歴史的な位置づけと果たしてきた役割に注目し、ケアと養生の考え方の多様性とその変遷に検討します。

日時 11月11日（日） 10時～17時
会場 第4セミナー室（定員80名）
※参加無料、要申込、日英同時通訳あり

国際シンポジウム

「大規模災害とコミュニティの再生」
第1部 11月16日（金） 12時20分～16時
「大規模災害時にローカルメディアが果たす役割」
第2部 11月17日（土） 10時～13時20分
「災害から文化遺産が復興する意義」
第3部 11月17日（土） 14時～17時20分
「コミュニティにおける災害の記憶の継承」
会場 第4セミナー室（定員50名）
※参加無料、申込不要、日英同時通訳あり

カムイノミ（神への祈り）

みんなくで収蔵されているアイヌの標本資料への感謝と安全を願い、社団法人北海道アイヌ協会の協力をえて、カムイノミをおこないます。あわせて古式舞踊も披露します。
日時 11月29日（木） 10時30分
場所 国立民族学博物館 玄関前広場
（雨天の場合は屋内で開催）

展示場新構築のお知らせ

本館展示場「日本の文化」展示のうち「祭り」と芸能」と「すまいとくらし」の一部が来年3月に新しく生まれ変わります。それに伴い、「日本の文化」展示全体が工事のため閉鎖されます。
閉鎖期間 11月上旬～
平成25年3月21日（木）（予定）

みんなくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時（13時開場）
定員 450名（当日先着順）
参加費 無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です。ただし、11月17日は無料観覧日につき観覧無料です）

特別展「世界の織機と織物」関連

第414回 11月17日（土）
東南アジアの織機と衣装
講師 内海涼子（大阪成蹊大学教授）



ベトナム北部ライチョウ省の民族ルーの娘たち

インドネシアやベトナムを中心に、東南アジアとその周辺地域でのような織機が使用されてきたかを概観します。それらの織機で織られてきた布の素材や装飾技法、さらにはどのような形の衣装として着用されてきたかを紹介します。

第415回 12月15日（土）

樹皮舟を復元する——極東ロシアの白樺樹皮文化
講師 佐々木史郎（国立民族学博物館教授）



樹皮舟を操る

二〇〇五年夏にロシア連邦ハバロフスク地方のアムール川下流域に暮らすナナイと呼ばれる先住民族の村で白樺樹皮舟の復元製作を行い、それを標本資料として本館に収蔵しました。その工程と技術そしてその背景となる彼らの白樺樹皮文化を紹介します。

友の会

友の会講演会（大阪）

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名（当日先着順、会員証提示可）

第414回 12月1日（土） 14時～15時
みんなくコレクションを語る
ネパールの金のはなし
講師 南真木人（国立民族学博物館准教授）
ネパールの女性が所有するさまざまな金の装身具は成人や結婚のお祝いとして贈られます。砂金の採取と精錬金の加工と販売はそれぞれ異なるカーストや民族の人びとがおこなってきました。私が収集した金細工具や、木の実を用いた分銅などもお見せしながらお話しします。

第415回 1月5日（土） 14時～15時
時間の変更あり
クリスマスからイースターにかけての祝祭から
講師 宇田川妙子（国立民族学博物館准教授）
ヨーロッパでは冬から春にかけてさまざまな祝祭があります。農閑期であるという事情もありますが、それ以上に新しい年を迎える、つまり時間の変わり目であるということと深く関わっています。複数の暦が錯綜するヨーロッパの事情もふまえ、「時間の区切り」について考えてみましょう。

東京講演会（今回は横浜にて開催）

会場 JICA横浜会議室

定員 40名（要申込）

第104回 12月9日（日） 14時～15時

世界のバスポート／バスポートの世界
講師 陳天璽（国立民族学博物館准教授）

バスポートはなぜ必要なのでしょう？ 世界各地のさまざまな種類のバスポートの事例をとおして、それぞれの保証内容や発行機関について、また、発行する側と所持し使用する側の意識のずれなど、人びとの帰属意識をめぐる思いについても考えてみます。海外移住資料館が所蔵する日本最古のバスポート（複製）なども観覧します。

※講演会、資料館見学のあとに横浜中華街の華都飯店でお食事会も開催します。メニューにはない「酸菜火鍋」などをご用意いただけます。

●無料観覧日のお知らせ

11月3日（土）祝）は文化の日、17日（土）、18日（日）は関西文化の日のため、本館展示・特別展を無料で観覧いただけます。ただし11月3日は、自然文化園を通行される場合、入園料が必要です。

※イベントや刊行物について、くわしくはホームページをご覧ください。くわしくはホームページをご覧ください。くわしくはホームページをご覧ください。

※電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時（土日祝を除く）です。

吉本忍 責任編集

『바닥——차바에서 세계로』
（邦題：パティック—ジャワから世界へ）
釜山外国語大学 東南アジア研究所
本書は2006年に国立民族学博物館が開催した特別展「更紗今昔物語—ジャワから世界へ」の韓国語翻訳書である。

日高真吾 編

『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』
千里文化財団 定価：1,575円
本書では、東日本大震災であらためて気づいた過去、そして現在の記憶をどのように継承するかについて私たちの生活文化の基層をなす、文化遺産について着目し、被災した文化遺産への支援活動についてとりまとめた。

刊行物紹介

須藤健一 編

『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』
風響社 定価：5,250円
オセアニアの人びとは、グローバル化のうねりに裊とし、強い文化と「祖先のやり方」とを節合して自分たちのものにしてきた。本書は、移民、民主化、開発、観光などの現場に生きる島人の素顔を描いている。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

ポンペイ島の究極の胡椒、
ポンペイペッパー

南太平洋のミクロネシア連邦のポンペイ島は胡椒が特産で、香りや風味が強い「究極の胡椒」とも呼ばれています。

レインボーネシアといわれるぐらいに降雨量が多く湿度の高いミクロネシアで育った胡椒は、その香りを含む揮発性の成分が揮発せずに粒のなかに閉じ込められ、香りの高い胡椒になります。今月は、島内最大の農園「セイ・ボタニカル・ガーデン」にて完全リサイクル型有機農法で育まれた胡椒と、胡椒の佃煮をご紹介します。

ポンペイペッパーを砂糖、醤油、酒糟で煮詰めた佃煮は、和食として「胡椒茶漬け」などで召し上がるもよし、チーズや肉料理などと合わせても美味しくいただけます。



ホワイトペッパー（ホール）28g 600円
ブラックペッパー（ホール）28g 600円
胡椒の佃煮 30g 750円

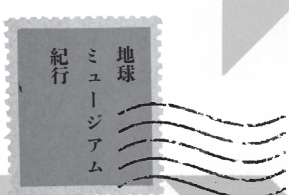
価格はすべて税込

森の中の日本資料

— フィンランド・国立諸文化博物館

小島 摩仁

鹿児島純心女子大学教授



海外の博物館で、自国の資料が展示されていると、不思議な感覚を覚えることはないだろうか。それは外国だからという理由だけではなく、
収集・展示・保存のしかたや方針、思想の違いにもよるのだろう。

映画館と同居する博物館

在外日本資料調査のためフィンランドの国立諸文化博物館 (Kulttuurien museo, 英語表記 the Museum of Cultures) を訪ねた。館名が日本語に訳しにくいのだが、日本における国立民族学博物館と同様に異文化を紹介する博物館である。

ヘルシンキ中央駅からほど近い商業地域のフレドリキン通りを北上するとやがて、かまほこ形の屋根のモダンな建物が見えてくる。直訳すると「テニス宮殿」という建物で、東京が返上した一九四〇年の夏のオリンピックのために屋内テニスコートとして建てられた。第二次世界大戦のため結局ヘルシンキ大会も中止となった。現在は文化複合施設になっており、ヘルシンキ市立美術館、諸文化博物館とともに、いわゆるシネコンが入っている。建物への入り口には映画のポスターが貼ってあり、一階には飲み物やチョコレート、キャンディを売っている店があり、にぎやかだ。二階に上がると博物館の入り口があり、落ち着いた雰囲気のみュージアムショップが出迎えてくれる。

収蔵品は約四万点。一九世紀以降、宣教師、船乗り、収集家、冒険家、実業家によって収集された資料が寄贈されている。ヨーロッパの博物館コレクションの多くがそうであるように、諸文化博物館の収蔵品の多くも博物館の意思によって統一的に収集されたものではなく、数多くのコレクターの興味関心によって収集されたものを一カ所に集積している形だ。この点は明治以降、曲がりなりにもある方針のもとに収集されてきた日本の博物館とは大きく異なる。

この日本展示の目玉は茶室で、展示室のエントランス部分に常設されている。この茶室は

二〇〇九年の日本・フィンランド修交九〇周年を記念した催しのために作られた。その他、衣装のコナーでイヌイットの毛皮のコートとともに日本の婚礼衣装が展示されている。

森の中の収蔵庫

フィンランドの国立博物館は共同で中央収蔵庫という建物と組織を持っている。展示室の多くは街中にあるため、収蔵庫のスペースがとれず、ヘルシンキから六〇キロほど離れたオリマッテラという小さな町の郊外の森の中に収蔵庫がある。この土地は、フィンランドで一九五六年から一九八二年までの二六年間大統領を務めたウルホ・ケッコネンが、退任後回想録を書くための別荘を建てる予定で所有していた土地を寄贈して設立されたという。こうした事情も日本の博物館とは大きく異なると感じた。

中央収蔵庫は、金属、木製品、布、陶磁器など資料の素材によって収蔵場所がわかれており、それぞれ適切な温度・湿度が設定され、保存専門の職員によって大事に管理されている。

特に驚いたのが、一〇〇年ほど前に収集された日本の蓑である。日本であれば、蓑製品はほとんど管理を徹底していても、かなり薫くすが出て、形が崩れているものだが、フィンランドの国立中央収蔵庫に収蔵されていた蓑は、大げさに言えば作ったままの姿でそこにあった。担当の保存専門の学芸員も収蔵資料の中でもっとも好きな資料のひとつだと賞賛していたが、すばらしいものだった。

日本の収蔵方法と大きくちがうのは、資料をなるべく広げて保存しようとしていることだった。蓑が収納されている木製ケースも二六〇×二五四ミリメートルもある大きなものだ。そのほか、掛軸などでもできるだけ広げた状態で保存しようとしていることがうかがえた。長いものは太い紙管を芯にして巻くなどしていた。賛否はあるだろうが、資料に余計なストレスをかけないという考え方は徹底していた。

これほど大事にされている蓑は世界中探してもないのではないか。この蓑を作った日本人も遠くはなれたフィンランドでこれほど大切に扱われているとは思えないだろう。消耗品でありながら機能的かつ丁寧に作られた蓑を見ながら、かつての日本人の手を抜かない仕事ぶりに感銘を受けるとともに、フィンランドの博物館関係者の細やかな配慮と徹底した仕事ぶりにもまた感銘と感謝を覚えた。



蓑を収納している木製ケース

蓑の細部



中央収蔵庫の看板



茶室の展示



諸文化博物館の入っている建物。シネマコンプレックスや市立美術館も入っており、まさにカルチャーコンプレックス

面白イモノ その3

つくりものは現場で作られる

笹原 亮二 民博研究戦略センター

地元の脈絡とは無関係だが、造形に凝った芸術性の高いつくりものが、審査の場にあらわれた。審査されるのは、つくりものをつくりものたらしめるはずの、現場性そのものかもしれない。つくりものとはなにか？現場とはなんなのか？

口上もあり、寸劇もある審査会

つくりもののおもしろさは、傍目にも理解が容易な造形面以上に、題材の地域性や時宜性など長年祭りであることを作り、見て、批評するなかで培われ、体得され、共有されてきた、地元の人びとならではの想いや感覚に支えられてこそ成り立つ。そうしたつくりものの地域の生活の現場の状況や文脈に深く依存したあり方は、平田一式飾に限ったものではない。



矢部の八朔祭大造り物「なでしこひょう(豹)ひょう(豹)と世界一」と寸劇

熊本県山都町で毎年九月初旬におこなわれる矢部の「八朔祭」では、町内の連合組などによって「大造り物」が作られ、町の各所に飾られる。何れの大造り物も、杉の葉や松笠やスキなどの野山の採集物を用いて台車上に作られ、高さは大きなもので

四メートルを越える。祭りまで出来上がりは秘匿され、祭り当日に囃子や仮装の人びとを伴い町内を巡行してお披露目される。山都町の大造り物は江戸時代中期に八朔行事に因んで始まったとされる。



矢部の八朔祭大造り物「守護神仁王降臨 阿咩(あうん)の呼吸でがんばれ日本」と寸劇

審査員を当惑させるつくりもの

富山県高岡市福岡町では毎年九月三、四日に「つくりもん祭り」がおこなわれ、町内や企業などのさまざまなグループによって野菜類を用いて作られた「つくりもん」が町の二〇カ所以上に飾られる。つくりもんは地蔵の縁日に因んで始まったとされ、かつては「地蔵祭り」とよばれていた。現在も祭りの際は町内の地蔵堂や福岡駅近くに町内の地蔵を集めて法要が営まれている。つくりもんは野菜で作った小さな人物や動物を複数組合せて情景を構成するものが多いが、高さが三、四メートルにもおよび大作も作られる。題材は時事的な話題や人気のアニメやテレビドラマなど周知の話題が選ばれる。例えば昨年の場合、立山の芦峯寺の法会に因んだ「布橋灌頂会」、着工が切望される「北陸新幹線の優姿」、映画のリメイクが話題になった「黒部の太陽のときめき」というように、地元ならではの題材も少なくない。



福岡町のつくりもん「布橋灌頂会」

この祭りでもつくりものの審査がおこなわれているが、昨年は審査に関連して興味深い事態が生じていた。この年は実行委員会の要請で地元の芸術系の大学の学生が初めて祭りに参加した。彼らの「Salada Circus」と題されたつくりもんは、鏡で囲った空間にライトと果物と野菜を配し、外から穴をおしてのぞき込むもので、祭りでは見物の行列も見られた。それに對し、「従来なかった斬新なもので、あらたな風を祭りに吹き込んでくれたが、果たしてこれがつくりもんか評価に困った」という審査員の見解

が表彰式で示された。審査では、つくりもんの製作の技術と、いかなる題材をいかに表現するかという趣向の両面で評価が決まるが、何れの面でもどう評価すればいいのかわからず悩んでしまったというのである。

学生のつくりもんが吹き込んだあらたな風が、今後祭りにどのような影響を与えるかも興味をそられたが、そうした審査員の当惑は、つくりもんの性格を却って浮かび上がらせたようにわたしには感じられた。従来のつくりもんでは、作り手と見物人双方に周知の時宜的、地域的、現実的な題材を、技術や趣向や機智を尽くしていかに巧みに表現するかが眼目とされ、地元の人びとの生活の現場の文脈や状況への依存度が極めて高かった。一方学生のつくりもんは、題材と現実の事柄との対応が必ずしも明確ではなく、重要ともされず、地元の人びとの生活の現場から離床した抽象的な表現となっていた。換言すれば、前者は作り手や見物がかかわった祭りという現場の文脈や状況に依存して作られることで、深く豊かな意味や価値を生み出していたのに対し、後者は祭りという現場とのかかわりを必ずしも必要とせず、街のギャラリイにあっても違和感がないような、脱文脈、脱状況依存的な表現として意味や価値を主張していたといえる。審査員の当惑はそんな両者の違いに起因していたのではないだろうか。

博物館を当惑させるつくりもの

福岡町のつくりもんは、来春オープン予定の民博のあらたな日本展示で平田一式飾と山都町の大造り物とともにお目見えする予定である。福岡町のつくりもんに見られた現場の文脈や状況への依存性は、ほかのつくりものにも同様に見られる重要な特徴であるが、そもそも脱文脈、脱状況依存的な博物館の展示室でそれを示さなければならぬのは、何とも悩ましい限りである。もともとそれ以上に悩ましいのは山都町の大造り物である。展示場向けにやや小振りに作ったとはいえ、やはりでかい。地元は「事前に展示場を測ったし、大丈夫、収まります」と太鼓判を押してくれたが、生来の小心者のわたしとしては内心ヒヤヒヤである。

鳥の笛からはじまった

下川 祐真

立命館大学フェアトレード団体 beleaf

人びとのつながりから生まれたフェアトレード。単なるビジネスを超えた「気持ち」があれば、

世界がかかえるさまざまな問題も解決していけるのではないか。その信念をもって学生フェアトレード団体の beleaf は活動を続ける。

leaf x beleaf x beleaf

立命館大学フェアトレード団体 beleaf は学生によって運営されている。二〇〇五年から今に至るまで約七年間、フェアトレードの活動を通じて貧困問題や環境問題にアプローチしている。beleaf とは、「葉」の leaf と「信念」の belief をかけた言葉である。一枚の葉は、太陽の光を浴び、大地の水を吸い上げ、無限の力を生み出す存在である。我々は、その力を信じ、自らも「言の葉」となって、貧困や環境破壊などの問題にとりくんでいき、世界を作り出す担い手になりたい、と考え、団体名を beleaf とした。

beleaf の活動は週一度の全体ミーティングで勉強会をおこない、今後の企画の話し合いなどを行っている。学生にフェアトレードを認知してもらうため学内では生協購買部に商品を置いてもらい、食堂などにもフェアトレード食材を使用したメニューを導入してもらった。独自の企画で、フェアトレードコーヒー試飲会やカフェなどもおこなっている。学園祭

にも参加し、学生へのフェアトレードの普及を図っている。また学外では国際協力系のイベントに参加し、beleaf とフェアトレードの広報、「鳥の笛」の販売、鳥の笛絵付け体験などを試みている。さらに小中学校、高校へ出張授業に出向き、生徒たちにフェアトレードに触れる機会を提供している。

鳥の笛との出会い

そもそも、この団体の立ち上げのきっかけとなったのは、後に初代表となった渡辺真実さんがインタンに行ったタイのミラー財団という NGO から鳥の笛を買ったことだった。もともと鳥の笛は鳥の形をしていなかった。タイのナイトマーケットに売られていた狩り用の笛を、ミラー財団に勤めている人が見つけた。音を鳴らし鳥を呼び寄せ狩りをするためにあったこの笛を、タイにいるさまざま鳥の形にすれば可愛いし売れるのではないかと考

クトとして作られており、十数名の山岳民族の元気なお母さんたちが制作している。以前は不安定な日雇い暮らしであったが、このプロジェクトに参加することにより、生産者たちは口をそろえて「安定した収入が継続的にえられるようになり、子どもたちと過ごす時間が増え、生活に余裕が生まれた」と語る。

気持ちが世界を変える

フェアトレードは前向きで爽やかな試みだと思える。生産現場の彼女らは「生活が良くなった」と笑顔で語る。彼女らの生活の質は向上したといえるだろう。通常の貿易は、生産者の顔が見えず、不透明な部分が多いが、フェアトレードはこの問題を是正している。

もともと筆者は友人に誘われてフェアトレード団体 beleaf に入るまでは恥ずかしながらフェアトレードのことは聞いたこともなかった。しかし、活動を続けていくうえで、フェアトレードの前向きさ、爽やかさを感じ、そこに惹かれた。フェアトレードやオーガニックの商品など、人権や環境に配慮した商品を購入しようとするとき、もちろん品質の良さや自分の好みで選択することも大事であるが、それ以外に生産者や労働者、地球のことを思いやる気持ちがあるのを感じないだろうか。商品を買うと同時に、なにか良い事をしたという気持ち、後味の良さを感じるのではないだろうか。それぞれの生産者、労働者も気持ち良く仕事ができていなければ、わたしたちも気持ち良く消費行動ができるであろう。このような取引の輪が世界を変えるのではないかと筆者は beleaf に入ってから感じている。



下鴨神社でおこなわれた左京ワンダーランドでの出店。イベントに来てくれた人や観光客と交流した

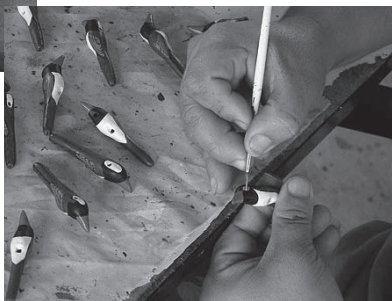
中学校への出張授業。児童労働についてのワークショップ



大阪府枚方市、くずはモールでの鳥の笛の絵付け体験。来場者は思い思いの鳥を描いた



鳥の笛の生産現場



丁寧に絵付けをする生産者



鳥の笛販売イベント

マンガ文化は永遠か

しょうし ひろし
庄司 博史

民博 民族社会研究部

変わる日本の存在感

ヘルシンキの街の中心部に営業するマンガカフェは開店前からオタクがたむろしコスプレの少女たちが出入りする。マンガやアニメについて、たぶん平均以下の知識と平均以上の偏見をもって、この人気も一過的とたかをくくっていた筆者だが、ここを訪れ正直その信念は今少し揺れている。

日本のマンガやアニメの海外での人気をメディアがとりあげても二〇年はたつたろうか。バブルの打撃から日本経済が慢性的低迷時代に突入していたころだ。今や科学技術でも韓国や中国に追い上げられ苦境に立たされている。ヨーロッパでは店頭にならぶ商品はもちろん、観光客の数やかれらの購買力でも、日本の存在感はずっと薄くなっているようだ。

そんななか、日本のマンガやアニメが欧米などで若者文化を席卷している現象にメディアは飛びついた。政府もマンガ、アニメなど日本のポップカルチャーを日本固有の文化に格上げし、クール・ジャパンのブランド名で売りたいことに必死だ。

しかしこの間、マンガやアニメが各地の文化になじんだことで地元の作家も輩出しはじめ、一方で韓国などは日本マンガを巧妙に模倣しつつ市場を脅かしている。近年はジャパポップの独走にかけりを予見するひともいる。ここヘルシンキでも書店にはマンガに混じって韓国マンガが並び、マンガカフェの壁には日本マンガと見まごうタッチの地元の愛好家の作品が掲示されている。



ヘルシンキにあるマンガカフェの看板

フィンランドに根付くマンガ文化

こんな場所でマンガカフェは経営的にやっつけていけるのか。親しくなったカフェのオーナー、ミッラさんに尋ねた。基礎学校低学年でTVやビデオアニメに触れ、高学年でマンガに夢中になった。高校で二層のめり込んだ彼女は、趣味でも生計でも一生これに捧げる決心をしたという。彼女もマンガブームが頂点を過ぎたという話は耳にしたことがある。しかし、その後もマンガカフェの客は減らず、今春ここに移転してからは増えてさえいる。

人口五〇〇万のフィンランドにマンガ専門の出版社は三社あり、一〇〇シリーズ以上がフィンランド語訳されている。現地のマンガ家の作風も日本色べつたりから社会風刺的なものまで多様化しつつある。マンガフェアやコスプレ大会は年数回開かれ、今年九月開催されたコスプレ大会には五〇〇人以上が参加し、日本のマンガキャラクターが大人気だったという。

それでもあのコスプレはこの社会になじむのだろうか。今フィンランドでは子どもはほとんどマンガとアニメに夢中で、今の二〇歳代はすべてそうして育ってきた。そんな文化に偏見のない人がやがて中年になっていくと日本食のようにマンガやアニメ文化も社会全階層に自然に受け入れられるのではないか、現にかつて下品とさげすまれたアメリカのジープは今、ティーンのところ着ていた高年齢者にも愛用されている。「でしよ?」、ミッラさんは言った。筆者にはかれらがマンガやアニメのなに惹かれるかよくわからないが、まだ健在らしいことは確かかのようにだ。

みまぼく 私の逸品 蓋付菱形香炉の置物

標本番号 H0067188
地域 オーストリア共和国
受入年 1979年

法政大学特別教授

ヨーゼフ・クライナー

この香炉の様子は、明治時代に外国に輸出された薩摩焼金欄手きんらんてを真似まねており、この写真では見えない裏側に、確かに漢字で「大日本」というブルーの文字の焼付けがある。また、蓋には獅子ししを真似てはいるものの、むしろ子犬のようなつまみ部分がついている。この香炉は同じような模様の花瓶二個との三点でひとつのセットである。これらはおそらく昭和の初めごろの香港か中国の製品であるとみられる。

実はこのセットは一九七九年にわたしの母（アンナ・クライナー）が他界した後、国立民族学博物館に収蔵されたウィーンの台所・居間・寝室家具・生活道具のコレクションの一部である。母は一九〇七年に生まれ、ウィーン郊外で庶民の生活を営む少女時代を送り、一九三〇年に結婚した。結婚してから当時の中部ヨーロッパで活動していた中国人の行商人からこれらのセットを購入したと考えられる。母は化粧台の鏡の前に自分で作ったレース編みを敷き、このセットを飾っていた。この香炉には首飾りを入れて使っていた。わたしは小さいころ、これらの品は日本のものだと思っていた。当時、ヨーロッパの日本のイメージはこういう二流、三流の中国産の品々によっても形成されており、これらは「ニッペス」（日本の置物）とよばれていた。

わたしは自分が将来よもや日本研究の道に入るとは思っていなかったが、ウィーンでは戦前・戦後を通じてこういう置物を大切にしてきた生活があったのである。わたしの育った家には、この香炉と花瓶のセットの他に、一式六人分の紅茶セットがあった。このセットも香炉と花瓶のセットと同じような経路でもたらされたものだろう。

最近わたしが調査している欧州の日本コレクションでは、ブルガリアのプロフデイヴ博物館が明治時代の起業家が使った同じような紅茶セットを保管していることを学芸員が誇りをもって報告している。



鹿の涙、人の涙——笹崎鹿踊りの復活

はやし いさお
林 勲男
民博文化資源研究センター

鹿踊りの被災
今年の六月、民博は岩手県大船渡市から仰山流(おんざんりゅう)笹崎鹿踊りの一行を招き、大阪と神戸で研究公演を開催した。関西ではこれまでほとんど演じられる機会がなかった東北の鹿踊りが、初日の民博講堂では約三五〇名、二日目の神戸市長田区(なごた)の若松公園鉄人二八号広場では約二〇〇〇名の観衆を魅了した。

鹿踊りは、太鼓踊り系と幕踊り系にわかれる。大まかにいって、太鼓踊り系は、宮城県北東部から岩手県南部にかけての旧仙台藩領に分布し、幕踊り系は、岩手県花巻市(はなまき)や遠野市を南限にして青森県の南東部にかけての旧盛岡藩領に分布している。太鼓踊り系には行(仰)山流、金津流、春日流などの流派がある。笹崎鹿踊りは、太鼓踊り系に分類される行(仰)山流のひとつである。

昨年三月一日に発生した津波では、岩手県大船渡市でふたつ、宮城県南三陸(みなみさんりく)でひとつの合計三つの鹿踊り団体が被災し、奇しくもすべてが行(仰)山流の団体であった。若い踊り手や役員、家族を亡くし、さらには踊りの衣装・なかから生まれ育まれてきた民俗芸能としての復活は、さらにひと月先のことであった。

芸能と地域

笹崎鹿踊りは、大船渡市や近隣の芸能祭に出演もするが、保存会員には笹崎の郷土芸能との意識が強い。地元の加茂神社の四年に一度の式年大祭に踊りを奉納し、その後会社や一般家庭を訪ねて門付け(かどづ)をおこなう。地区内にある大船渡中学校の文化祭では、保存会が指導している中学生たちが踊るため毎年の恒例行事となっている。

大船渡中学校での踊りの指導は平成元年に始めた。当時の大船渡中学校は生徒が荒れており、校長が地元の民俗芸能保存会に相談し、鎧(よろい)剣舞、七福神とともに鹿踊りの生徒への指導が始まった。それぞれの保存会の指導は厳

神戸市長田区での公演本番を前に



しいものであったが、逆にそのことで、多くの生徒たちが地域に伝わるこれらの伝統芸能に惹きつけられ、教師や親たち以外の地区の住民たちも関心を向けるようになって、三年ほどで学校は平穩

道具類を保管庫もろとも流されてしまった。

活動再開

笹崎鹿踊りの関西公演の予定が発表されると、地元には先駆けての公演でもあったため、多くのメディアは、関西からの支援へのお礼とか、阪神・淡路大震災被災地とのあらたな



民博講堂での再起の舞い

を取り戻していった。

当時の中学生が今では三〇代の踊り手だ。中学校での指導は続いており、二〇一一年八月には全国中学校文化祭に出場し、活動が休止していた大人たちの分まで熱演を果たした。しかし、そうした子どもたちも高校に進学したり、就職で地元を離れたりと踊るのをやめてしまう。何年か後に、地元で職をえて再び踊りを始める者もいるが、その数はきわめて少ない。民俗芸能の宝庫と言われる岩手県であっても、後継者不足は深刻である。

民俗芸能としての復活

七月はじめ、笹崎鹿踊りがいよいよ地元で復活の踊りを披露するというので出かけてみた。会場は大船渡小学校体育館。津波はこの体育館をも床上二〇センチまで浸水させた。体育館には地域の住民だけでなく、市の伝統芸能協会関係者やマスコミなど約一五〇人が詰めかけた。

踊りに先立って、踊り手たちによって、仏前(ぶつぜん)回向(えこう)の歌七首が、哀調を帯びた独特の節回しで位牌(ゐはい)に捧げられた。それを聞き入る人びとのなかには、目頭を押さえたり、ハンカチで涙をぬぐったりする者もいた。躍動感あふれる踊りとは対照的な死者供養も、鹿踊りが地域に対して担う重要な役割のひとつである。その後、舞台で新しい装束での踊りが披



地元での震災後初の舞いは、犠牲者の冥福を祈る回向で始まった

絆とかとの見出しを掲げた。関西公演がお礼や絆となることは、保存会メンバーも、そして企画したわたしたちも望んだことではあったが、民俗芸能である以上、その伝統がぐくまれた地元でこそ復活の踊りをと、誰もが切望していた。それが叶わなかったのは、被災地であるという状況のためであった。

笹崎鹿踊りは、スピード感あふれるダイナミックな踊りで知られている。地元の企業で働くSさん(四一歳)は、自分の年齢を考えて、すべての装束をそろえるには相当の時間がかかり、活動を再開できたとしても、その時には自分は体力的にもう踊ることはできないだろうと思ったという。踊りにまつわるさまざまな思い出と、自分の身体が覚えている感覚が落ち着きどころを失った寂しさを感じていた。

民博公演後の踊り手たちの汗にまみれた顔は、久々に観衆の前で踊った喜びに満ち溢れていた。なかには、目を赤く腫らせて、踊りながら涙を流していたと語る踊り手もいた。しかし、この関西公演は、笹崎鹿踊りにとっての活動再開ではあったが、人びとの生活の

露された。長年、鹿踊りを見慣れた住民からは、踊りの「勘どころ」で大きな拍手が湧いた。終了後、仲立(なかつた)のリーダー(リダー)を務めるKさん(四三歳)は、踊りの要所所でもらう拍手を聞き、回向をあげたときに涙を流す姿を見ると、踊り手の冥利(みょうり)に尽きると話してくれた。

関西二カ所での公演は、大勢の人に鹿踊りを見ていただける機会として大成功だった。しかし、民俗芸能としての踊りは、やはり地元の人のために地元でおこなわれて、はじめ

11月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

4日

(日曜日)

時間：14:30～15:30

話者：吉本 忍（国立民族学博物館 教授）

話題：アフリカの織物とプリント布

会場：アフリカ展示場

時間：14:30～15:30

話者：吉本 忍（国立民族学博物館 教授）

話題：オセアニアの織物

会場：オセアニア展示場

11日

(日曜日)

時間：16:00～17:00

話者：吉本 忍（国立民族学博物館 教授）

話題：東南アジアの織機と織物

会場：東南アジア展示場

※9月30日（台風のため延期）の内容です。

25日

(日曜日)

時間：14:30～15:30

話者：上羽陽子（国立民族学博物館 助教）

話題：ヤギ毛の繊維利用について

会場：西アジア展示場

1年間みんなくに何度でも入館できる「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893/平日9:00～17:00)

編集後記

これを書いている今、日本は3つの隣国と領土紛争の真ただ中にある。領土紛争ではどの当事者も領土の自国への帰属は明白で領土問題など存在しないといいはり、主張は平行線をたどるのが常だ。双方の円満解決というのはめずらしく、武力で奪取するか、実効支配で対立を温存するのが普通だ。一旦支配下におけば経済や政治での完全な排他的権力が行使できる領土の希求は近代国家にとって悲しいことに宿命なのだろう。ところで学問、特に人文学の世界ではどうだろう。自国文化への発言権は外国人にも平等だろうか。研究者の国籍で情報摂取が制限され、彼らの主張や見解への評価や接し方が異なるというのは残念なことだ。おりしも「日本学」を特集テーマとした本号では、関連記事をいれると6名の外国人執筆者にそれぞれ日本研究について独自の見解を展開していただいた。外国人の日本研究に、日本人はどのように接してきたのだろうか。日本の人文学に領土意識がまだ存在するのかわねたいところだ。(庄司博史)

●表紙：「異聞逸聞」(p 20) で触れられているフィンランド、ヘルシンキのマンガカフェ (撮影・庄司博史)

次号の予告

特集

大阪のなかの異文化(仮)

月刊みんなく 2012年11月号

第36巻第11号通巻第422号 2012年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂

編集委員 庄司博史(編集長) 小川さやか 樫永真佐夫
久保正敏 菅瀬晶子 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一孝

制作・協力 財団法人 千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

